

## 【「熊本の心」推進協議会賞】

### 目に見えない支援

山鹿市立鹿本小学校 5年 菊田 銀之介

僕は、今年の四月から、僕のおばちゃんが働いている施設の「賛助会員」になりました。その施設は、認知症の方が生活しているグループホームです。

僕は四年生の時、学校で認知症サポーター養成講座というものを学びました。そして、僕のおばちゃんが施設で働いていたので、認知症についての知識は多少ありました。いつも楽しそうに働くおばちゃんを見ていて、介護の仕事ってそんなに楽しいのかなと疑問がわきました。なぜなら、ニュースなどであまりよくない内容の話を見たり聞いたりしていたからです。おばちゃんの姿は、そのニュースとはちがって見えたので、介護の中身をもっと知りたくなりました。そのために僕に出来ることがないか、おばちゃんに聞いてみると、「賛助会員」というものがあると教えてもらいました。会員になると、施設での出来事はもちろん、みなさんがどんな生活をされているのかがお便りで届くそうです。

早速、僕はお小遣いから千円を会ひとして支払い、無事に会員になりました。毎月、僕あてに届く施設からの手紙。その手紙を通して、認知症の方がどんな生活をされているのかを知ることになりました。

とてもびっくりしたのは、職員の方もお年よりの方もすごく楽しそうに笑っている写真です。ニュースで見た悲しい印象とは全くちがいで、地域のフリーマーケットに参加されている写真、たん生会の写真は、僕らが普通に生活するのと同じように、お年よりの方もそこで同じように生活していました。認知症になったとしても、こんな風にできることがたくさんあるんだなとびっくりしました。

実はこの夏、僕のじいちゃんが脳出血で入院し、体の左側が上手く使えないかもしれないというショックな出来事がありました。僕はそのことを聞いて怖くなりました。じいちゃんが普通じゃなくなると思ったからです。でもそんな時、おばちゃんが、「普通って何？病気になったから普通じゃなくなるの？普通って何？」と言いました。おばちゃんは、例え体がうまく動かなくなっても、例え認知症になったとしても、人として向き合うことがどれほど大切なことかを僕に話してくれました。その時、僕は、恥ずかしくなりました。勝手にじいちゃんの普通を決めつけてしまっていたからです。これまでと何かが変わっても、僕のじいちゃんに変わりはない。だとしたら、じいちゃんができなくなったことを僕が代わりにやればいけないんじゃないかと気がつきました。

今回、僕は賛助会員になることで、僕自身が人としてどうあるべきかを教えてもらうことができました。例え利用者の方が僕を知ることがないとしても、僕に出来る支援の形をこれからも届けていきたいです。千円でつながる支援の輪が、もっとひろがりますように。